

秋の部優秀賞十首

ふるさとへ向う車窓に  
むか しゃそう

岩手山  
いわてさん

急に夫との会話が訛る  
きゆう つま かいわ なま

千葉県茂原市 下村 弘子

緻密なる南部鉄瓶もんようの  
ちみつ なんぶてつびん

指の動きの  
ゆび うご

点の確かさ  
てん たし

茨城県高萩市 大高 正男

啄木の  
たくぼく

教鞭とりし学舎で  
きょうべん まなびや

我也学びて啄木偲ぶ  
われ まな たくぼくしの

神奈川県藤沢市 秋山 昭子

ありがたきと啄木詠みしふるさとの  
たくぼくよ

山あたたかし  
やま

車窓に見ゆる  
しやそう み

兵庫県川西市 福井 順子

あえぎつつ夫と登りし  
おつと のぼ

岩手山サービスエリアに  
いわてさん

立ちて仰げり  
た あお

青森市 木浪 みつゑ

啄木が抜け出したとふ  
たくぼく ぬ だ

学校の跡地に立てば  
がっこう あとち た

秋風の過ぐ  
あきかぜ す

盛岡市 中嶋 富子

紅葉の  
もみぢば

積る錦の絨毯を  
つも にしき じゆうたん

盛岡城跡にふかふかと踏む  
もりおかじょうあと ふ

盛岡市 昆野 寛顕

らんかん あゆ よ  
欄干に歩みを寄せて  
なかつがわ そじょう さけ  
中津川を遡上の鮭に  
み い ひとがき  
見入る人垣

盛岡市 佐藤 忠行

ひだま ごと あなた っ き  
日溜りの如き貴方に付いて来て  
もりおか ふゆ  
盛岡の冬  
ごじゆつかいこ  
五十回越す

盛岡市 鈴木 操

サルビアの  
あか ほのお も っ  
赤き炎も燃え尽きて  
もりおか あきじよじよ ふか  
盛岡の秋徐々に深まる

盛岡市 鈴木 充

〔講評〕啄木を通した盛岡、岩手へのあこがれ、思いを詠んだ歌が多く見られ、主旨に十分添うものであった。

また、採り上げた作者が、県外と盛岡在住各五名であったことも今回の特徴である。

平成二十四年十二月選 秋の部

投稿数 百二十三首

選者 八重嶋 勲 氏